

〈論考〉

詩歌ブームは「軽い」のか？

——英語圏児童文学における詩の形から考える——

三辺 律子

遠くから来る自転車をさがしてた 春の陽、瞳、まぶしい、どなた

（『回転ドアは、順番に』穂村弘×東直子 ちくま文庫）

子どものころ、詩歌が苦手だった。うららかな春の情景が広がっているからこそ寂しいという犀星の詩に「なんかひねくれているなー」と思い、「知るも知らぬも 逢坂の関」の「逢（坂）」と「逢ふ」は掛詞と聞けば、「駄洒落じゃん」と笑い、『ホビットの冒険』の（文語調で訳された）詩の部分はわからないからと飛ばして読んだ。情緒のかけらもないけれど、わたしにとって、詩歌は教科書に載っていたりなじみのない言葉で書かれたりしている、なにやら高尚で、解説してもらわなければわからないものだったのだ。そんなわたしの目を詩歌に開いてくれたのが、大人になつて、さらにだいたったころ、もらった一冊の本だった。

現代短歌をけん引する二人、穂村弘と東直子による恋愛詩歌の往復メールをまとめた『回転ドアは、順番に』だ。冒頭に掲げた歌はその一首目だが、口語で書かれた三十一文字から、自転車は来るかと遠くへ目をやったときの、春の陽の眩しさ、言葉を四つ並べた畳みかけるような下の句と自転車が走るさまとの響き合い、そこにこめられた想いなどが一気にたちのぼり、わたしを魅了した。

今、若者のあいだで「短歌ブーム」が起きていると言われる。「若者に短歌ブーム：きっかけはSNS」（産経新聞 二〇一六）、「Z世代の心をつかむ短歌ブーム：31音の不安や焦りSNSで共感」読売新聞特設サイト 二〇二二）などから、雑誌『アンアン』（二〇二二年No.2317増刊号）などでも特集が生まれ、『短歌研究』の「特集 短歌ブーム」（二〇二二年八月号 短歌研究社）には、歌人や出版社や書店員などがさまざまな考察を寄せている。「同時代に生まれる短歌の魅力はやっぱり、現在の『空気